

文化的景観は生きた景観であり、伝統的な生業・生活の持続によって様相が生まれる。これを真に捉えるには、景観において生きる人々の実存に迫る必要がある。本研究は17世紀に始まり、20世紀中期の民藝運動の影響を受けた窯業の産地である、福岡県朝倉郡東峰村小石原皿山地区を対象とした。ここで写真投影法を適用し、窯元とその家族の目に映った工芸/焼き物の里の景観表象とその価値を追究した。また里への来訪者の見方も併せて扱い、窯元らと比較した。その結果、生活基盤要素の無意識下と背景要因の意識化がとくに職人の表象で確認された。また聖性と山水の表象が、生業の違いを超えて景観上、重要であることが示された。さらに薪積みの表象の新たな景観的価値と来訪者の役割が示唆された。

1. 研究の背景と目的

景観の実存的把握

生きた景観・地域の人々の心象の景観として、
地域の人々の風土性の表現として把握する必要性

文化的景観 = 地域の人々に固有の生活・生業の営み + 風土

地域住民の日常体験における景観要素から、その価値を把握。地域外の人間の価値観や思い込みではなく、根源的本質に迫り、文化的景観の保全活用を考える必要性

伝統的な第二次産業である窯業の産地であり、重要文化的景観・小鹿田焼の里の起源である、福岡県朝倉郡東峰村小石原皿山地区を対象として調査

- 目的：1) 窯元/家族の目・自由な選択をとおして、実存的な文化的景観の表象を直接的に把握する
2) 景観表象に対する窯元/家族の意識を、その属性に基づき探る
3) 里への来訪者の見方を窯元らとのそれらと比較して、文化的景観の相互主体性の本質に迫る

2. 研究方法

調査対象：福岡県朝倉郡東峰村小石原皿山地区の窯元とその家族 25 名、来訪者 10 名
調査方法：写真投影法により行った。デジタルカメラを1週間ほど貸出し、撮影を依頼し、記録用紙に撮影対象とその意図・評価を自由記述で記録してもらった。
分析方法：主対象の分類を行った後、評価を「肯定的」「否定的」「評価なし」に3分類した。

表-1 窯元/家族回答者の属性

性別(人)		出身地(人)			
男	女	小石原	小石原外		
9	16	14	11		
年代(人)					
10代	20代	30代	40代	50代以上	
3	2	4	7	9	
居住開始年代(人)					
1950年代以前	1960年代	1970年代	1980年代	1990年代	2000年代以後
3	2	2	6	6	4

表-2 来訪回答者の属性

性別(人)		来訪回数(人)	
男	女	初めて	2回以上
5	5	4	6
年代(人)			
50代	60代	70代	80代
1	6	2	1

3. 主対象：窯元/家族と来訪者

写真枚数：1人あたり33.0件(858件/26人)
標準偏差19.4件、K-S検定：z=0.365 p=0.999

表-3 主対象とその包括分類

		窯元/家族						
包括分類	移動・誘導(276)	自然(188)	作陶(126)	共有の場所(112)	居住(69)	聖性(83)	人間(4)	
主対象	道(150)	花(47)	焼き物(31)	場所・皿山(35)	家屋(60)	宗教設備(82)	人間(4)	
	サイン(101)	木(36)	唐臼(28)	伝統産業会館(15)	ゴミ(9)	茶室(1)		
	装飾(25)	川(26)	作業様相(25)	遊具(14)				
		林(26)	登り窯(16)	小石原工芸館(14)				
		動物(20)	えんとつ(13)	ギャラリー-小石原(11)				
		山(13)	薪(9)	広場(9)				
		空(7)	炭石(2)	休憩所(8)				
		草(5)	道跡(3)	皿山公民館(2)				
		池(4)	粘土(1)	道の駅(1)				
		沼(3)	ガス窯(1)					
	畑(1)							
		来訪者						
包括分類	移動・誘導(74)	自然(62)	作陶(141)	共有の場所(66)	居住(62)	聖性(9)	人間(0)	
主対象	装飾(29)	花(17)	焼き物(74)	場所・皿山(45)	家屋(49)	宗教設備(8)		
	サイン(24)	木(10)	薪(18)	小石原工芸館(12)	コンクリートの塊(2)	石碑(3)		
	道(18)	川(8)	唐臼(17)	伝統産業会館(8)	庭(1)			
	カーブミラー(3)	山(7)	登り窯(16)	遊具(1)				
		空(6)	作業様相(11)					
		草(6)	えんとつ(3)					
		林(5)	粘土(1)					
		畑(3)	ガス窯(1)					

カッコ内は撮影枚数。*は来訪者のみ

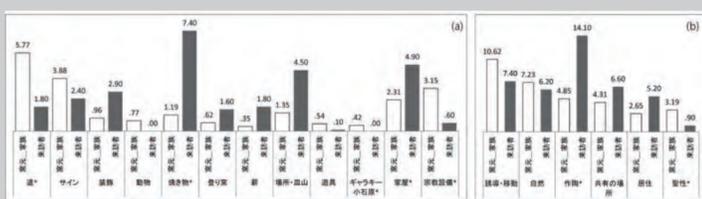


図-1 窯元/家族と来訪者の主対象(a)とその包括分類(b)の撮影数の平均値の比較。主対象は両被験者グループ数の比率に有意差のあるもののみ表示。*は平均値でも5%水準で有意な差が見られるもの(以下、同様)。

4. 窯元/家族の属性による差異と評価

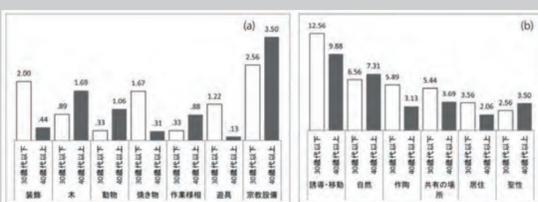


図-2 窯元/家族の主対象(a)とその包括分類(b)の撮影数の平均値の世代間比較。

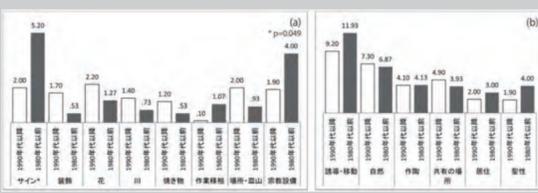


図-3 窯元/家族の主対象(a)とその包括分類(b)の撮影数の平均値の居住開始年代比較。

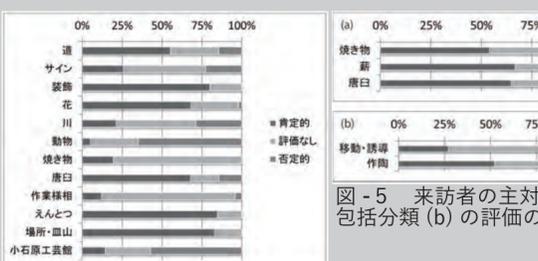


図-4 窯元/家族の主対象の評価の比率。

世代間比較

若年層：
【移動・誘導】【作陶】【共有の場所】
【居住】が多い
年長の層：
【自然】【聖性】が多い

居住開始年代比較

1990年代以降(新住民)：
焼き物やその装飾物、花や川が多い
1990年代以前：
宗教設備、作業様相、サインが多い

窯元/家族の評価

「サイン」否定的評価22.8%
「焼き物」「作業様相」は否定的評価が0件と1件また、評価なしが80.6%と84.0%
▶容易な評価を許さない
「川」と「動物」は山川の現状に課題があり否定的

窯元/家族と来訪者

窯元/家族：【移動・誘導】【自然】および【聖性】が多い
来訪者：【作陶】【共有の場所】および【居住】が多い

来訪者の評価

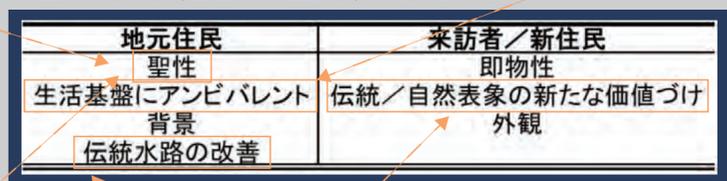
肯定的評価：「焼き物」54.1%、「薪」66.7%、「唐臼」64.7%の高さが際立つ
「薪」は現在、窯焚きでなく暖房や塗薬に利用：窯元/家族には意識されにくい
【移動・誘導】は肯定評価が相対的に少なく、【作陶】で高い

5. まとめ：文化的景観地の保全のあり方

景観表象とその評価の相違は、その扱いの合意形成の困難を暗示する
実存的景観の相互主体性を捉える必要性

作業様相の観光活用には丁寧な交渉が必要

まずは、これらの聖性の価値(普遍的な重要性)の活用を追究



生業の違いを超えて重要なもの 薪積みなどの新しい要素の活用に取り組む

付録：小石原焼の作陶の工程と自然資源利用 左：伝統的 右：現代的

